ティトゥス・リーウィウス第32巻試訳抄

吉　村　忠　典

前書き

本稿は、アウグストゥス帝時代のローマの歴史家リーウィウス（T. Livius Patavinus, 前59～後17年）の『建国以来のローマ史』（Ab Urbe Condita）第32巻を抜粋・邦訳し、注釈を加えたものである。内容は、いわゆる第二次マケドニア戦争の第三年目（前198年）にローマ軍の最高司令官として登場し、前197～6年に大勝利のうちにこの戦いを終らせたフラミニーヌス（T.Quinctius Flamininus）の前198年における活動の模様である。

この史書はローマ建国の経緯から前9年までの歴史を年代記形式で叙述したもので、ラテン文学の黄金時代とされるアウグストゥス時代のラテン語散文の最高レヴェルを示すものとされる。もと142巻から成ったが、第1巻から第10巻までと、第21巻から第45巻までがほぼ完全または半ば完全に残っている。

前2世紀のギリシャの歴史家ポリュビオスは、地中海世界に対するローマの支配、いわゆる「ローマ帝国」が前220年から前168年にかけて――すなわち第二次ポエニ戦争の開始から第三次マケドニア戦争の終結まで――の53年間に成立したと述べているが、リーウィウスの中でも第31～45巻は、ギリシャでの出来事に関する限りポリュビオスに忠実に従った部分が大きく、ポリュビオスは前170年ごろ実際に政界に活躍していた人なので、リーウィウスの叙述の信憑性も高いと考えられる。従って、たとえば、本稿の21章の終わりのパラグラフは、ローマの帝国支配の下に入ろうとするギリシャ人の心情をほとんどナマで示す貴重な史料だと言いうる。

リーウィウス現存部分の全訳が近く京都大学出版部から発行を開始されるはずであり、第31巻以降が小池和子氏（東京大学助教、ラテン語・ラテン文学専攻）と私との共訳で2010年から発行される予定である。本稿は吉村なりのその予備作業として書かれた。

（付記）通常使用されるテクストには（例えば聖書のように）細かい章・節

の区分がついているが、本訳では、章別の数字だけ挙げた。なお、括弧（・・・）は訳者が補った部分である。

試訳

(7)（前199年統領（コンスル）ルーキウス・レントゥルス監察官（ケンソル）選挙の民会を主催した。多くの名士が立候補した中で、プブリウス・コルネリウス・スキピオ・アフリカーヌス[1]とプブリウス・アエリウス・パエトゥスが当選した。

（レントゥルスは、一旦ローマを離れたが、前198年度の）公職の選挙を行うためにローマに呼び戻された。この選挙は護民官マルクス・フルウィウスとマーニウス・クリウス[2]に妨害された。彼らは、ティトゥス・クインクティウス・フラミニーヌス財務官（クアエストル）からいきなりコンスルに立候補したのが許せなかったのである[3]。按察官（アエディリス）とプラエトルのポストは軽蔑され、知名の人士は公職就任の段階を踏んで自己の業績の証拠を誇示しつつコンスルの地位に手を伸ばすのではなく、中間のポストを飛ばして、最低のポストに続けて、いきなり最高のポストにつこうとする、と。この争いは、（選挙民会の会場である）「マルスの野」から元老院に持ち込まれた。元老院の決議は、就任することが法的に許されている[4]ポストに立候補する者については、ローマ市民はその欲する者を選出する権利を持つべきである、というものであった。護民官は元老院の権威に服した。セクストゥス・アエリウス・パエトゥスとティトゥス・クィンクティウス・フラミニヌスがコンスルに選ばれた。

(8) コンスルに選ばれたセクストゥス・アエリウス・パエトゥスとティトゥス・クィンクティウス・フラミニヌスが任に就き、カピトリウムの丘に元老院を召集すると[5]、元老院は両コンスル管轄（プロウィンキア）[6]をマケドニアとイタリアの両地域とし、いずれがいずれを取るかを、話し合いもしくは抽選によって決定すること、マケドニアを受け持つことになった者は、軍団の補充として、ローマ市民兵3000と騎兵300、およびラテン権諸国を含むイタリアの同盟諸国[7]の歩兵5000、騎兵500を徴集すること、いま一人のコンスルは全面的に新しい軍隊を編成すること、という決議を行った。コンスルが管轄を抽選で決め、アエリウスはイタリアを、クィンクティウスはマケドニアを得た。

次に、両コンスルはアッタロス王（一世「救い主（ソーテール）」ペルガモン王国の王（前241～197在位））の使節を元老院に導き入れた。彼らは、王が

この日まで自己の艦隊とすべての兵力をもって海に陸にローマを助け、ローマのコンスルが命令する事は全力をあげて素直に実行してきた[7a)]、と説明し、さらに次のように述べた。――海陸の守りを失ったアッタロスの王国がアンティオコス（三世「大王」、シリア王国の王、前223～187年在位）に攻められたので、彼はもはやそのためにローマを助けることが出来なくなるのではないかと恐れる。それゆえアッタロスは元老院議員諸氏にお願いする。もしマケドニアに対する戦いに自分の艦隊と労力とを使いたいのであれば、自分に王国を守るための守備隊を送っていただきたい。もしそれを望まないならば、自分が自分の領土を守るために、艦隊その他の兵力を率いて帰国することをお許しいただきたい、と。元老院は使者に次のように答えるよう命じた。――アッタロス王が艦隊その他の兵力をもってローマの将軍たちを助けたことを元老院は感謝している。だが、自分たちはアッタロスに、ローマの同盟者であり友である[8)]アンティオコスと戦うための援軍を送ることはしないであろう。またアッタロスがローマ軍に送ってくれた援軍[9)]を、王の利便の範囲を逸脱してまで手元に置くこともしないであろう。ローマ人は、外国のものを利用するに当たって、常に当該外国人の意のあるところに従ってきた。そのような利用をいつ開始し、いつやめるかについても、彼ら、力をさいてローマを助けようとする人たちの許すがままにしてきた。我われはアンティオコスに使者を送り、「ローマ国民はアッタロスとその艦隊および兵士の助力を、両者の共同の敵であるフィリッポスに対して用いるものである。貴下がアッタロスの王国から手を引き、戦争も中止されれば、貴下は元老院に感謝されるであろう[10)]。ローマ国民の同盟者であり友である王たちが、ローマとの間ばかりでなく、お互いの間でも平和を守るのはよき事である」、と伝えよう。

(9) 一方のコンスル、ティトゥス・クインクティウスは、これまでのコンスルたちの慣習よりも早くブルンディシウムから海を渡り、8000の歩兵と500の騎兵を持ってコルキュラに入った。コルキュラからは五の船（ペンテレス）でもっとも近いエーペイロスの岸に渡り、強行軍でローマ軍の陣営に急いだ。そこから（前任者）ウィリウスを帰国させると、軍隊が自分を追ってコルキュラから到着するまで、数日間そこにとどまり、顧問会を開いて、まっすぐに敵の陣地を力いっぱい突き進むべきか、それとも、そのような労苦と危険を試みることなく、ダッサレティイ族の土地とリュンコスを通る安全な迂回路でマケドニアに侵入すべきかを議した。だが、（ローマ軍が）海から遠く離れた場合、王が敵を見

失ってひと気のない森の中で身を守ろうと望んだならば、ローマ軍は何も得るところなくひと夏を浪費することになるのではないか、――そのような事態を恐れさえしなければ、迂回路を回ろうという意見が勝ちを制したかもしれない。いずれにしても、このようにして、地勢の不利な場所で敵を攻撃しようということになった。しかし、そうしようという結論は出たものの、どのようにすればよいのか、という答えは出なかった。(10) そして、40日ものあいだ、坐したまま、敵を眼前に眺めながら、何もなすところなく過ごした。

そのためフィリッポスは、エーペイロス人を介して和平をさぐる希望を抱くようになった。エーペイロス同盟総会が開かれて、それを行うために同盟の長官パウサニアスと騎兵長官アレクサンドロスが選ばれ[11]、コンスルと王とをアオーオス川が最も狭まっているところに設定した対話の場につれてきた。コンスルの要求を要約すれば次の通りである。王は諸国に置いた守備隊を引き上げること。王は略奪を行った農村や都市では、現存するものは返還し、他は公平な裁定者によって価格を評価すること。これに対して、フィリッポスは答えて言った。それは国によって事情が異なる。自分が奪ったものは手放そう。だが、私が祖先から受けついだものについては、世襲による正当な所有権を放棄するつもりはない。もしも私が戦った国々が何らかの被害を訴えるならば、双方が平和関係を維持してきた国の人で彼らが望む人に裁定を乞うであろう。これに対してコンスルは言った。だが、少なくとも貴下のいうそのことに裁定人や審判人などは無用である。先に戦争を仕掛けた者から不正が生じたこと、フィリッポスが誰からも戦いを挑まれることなく、みずから先んじて万人に暴力を振るったのであることを、誰か見たがう者があろうか。――そして、どの国々が自由を得るべきであるかが問題になると、コンスルは何よりも先にテッサリアの名を挙げた[12]。これに対して王は激昂し、憤然として叫んだ。「ティトゥス・クインクティウスよ、敗れた敵に対してすら、それより厳しい命令があるものか！」こうして彼は、対話の席を蹴って立った。王は辛くも怒りを抑えたが、さもなくば――中央の川が両者を隔てていたので――弓矢の合戦になっていたかもしれない。その翌日には両軍が陣地から討って出て、はじめ、それなりの広さのある平地で盛んに小競り合いを行い、のち、王の軍が狭くて起伏の多い場所に引き上げようとすると、戦闘意欲に燃えたローマ軍もまたそこに攻め込んだ。

(11) このような状況のなかで、エーペイロスの有力者カロプスから遣わされ

た一牧人がコンスルのもとに通された。彼はそのとき王の陣営によって占められていた谷で常ひごろ家畜を追っており、このあたりの山々の曲がりくねり杣道(そまみち)まで知り尽くしている、もしコンスルが若干の者を自分に同道させて下されば、敵の頭上まで、さほど嶮しくない道でご案内申し上げる、と申し述べた。コンスルはこれを聞くとカロプスのもとに使いを送り、このような重大な事柄についてこの田舎者を本当に信用してよいのだろうか、と訊ねさせた。カロプスはこれに答えて、その男を信じてもよいが、全体の状況を掌握しうるのはおん身ご自身であって、その男ではないことを心されたい、と伝えてきた。彼コンスルは進んで信用するというよりは信用したいと願っている、という、喜びと恐れの混ざった心境であったが、信望の篤いカロプスの言なれば、とばかり、眼前におかれた希望を実地に試してみる決心をした。そして、フィリッポス王の疑念をそらすために、つづく二日間はあらゆる方向に軍隊を配置し、兵士が疲労すると、入れ替わりに新手の兵を送ってあとを引き受けさせ、敵を挑発することをやめなかった。しかるのち、4000の歩兵と300の騎兵を選り抜いて、一人の軍団将校に委ねた。彼には、騎兵を場所のゆるす限り進軍させ、騎兵の通れない場所に来たら平地を見つけて待機させるように命じた。歩兵は、かの道案内人の示す方向に進ませた。約束どおり敵の頭上に到着したならば、煙で信号を送ること、だが、コンスル側からの信号を受けて戦闘の開始が分かるまで、叫び声をあげてはならぬ、そして、行進は夜に入ってから開始するように、と命じた。――時まさに終夜の月明に恵まれていた[13]――。食事と休息は昼の間に取るようにさせた。道案内人には、約束を裏切らなかったら、という条件で、山ほどの報酬が約束されていたが、その身柄は縄に繋がれ、軍団将校に渡してあった。この一隊を送り出すと、ローマ軍はますます集中して、あらゆる方向から敵に迫り、味方の足場を確保していった。

(12)　やがて三日目にはいると、ローマ軍が目的地としていた山頂を占領し保持していること狼煙(のろし)で伝えられた。コンスルは軍を三つに分け、みずからは谷の真ん中を強壮な兵士らとともに進み、左右両翼も敵陣に向わせた。敵も遅れじとこれを迎撃した。戦闘意欲に駆られるままに防壁のそとまで出て戦ってみると、ローマ兵は武勇、実戦知識、武器などにおいて少なからず敵にまさった。王ははじめ倉皇としてあとも顧みずに逃走したが、やがて5マイルほど進むと、土地の険しさからもはや敵も追っては来ないであろうと考え、ある丘の上に立ち止まり、八方の尾根や谷に部下を送り出して、彷徨する者を一ヶ所に

集めさせた。2000名弱の兵を失い、残りの兵すべてがあたかも何かの合図にでも従ったかのように一箇所に集まると、密集隊形を組んでテッサリアに向って落ち延びた。ローマ兵は王の陣営を掠奪した。そして、その夜は自己の陣営に留まった。

(13) その翌日、コンスルは谷あいに川[14]の流れる隘路を通って敵を追跡した。アイトリア人はアオーオス川畔の戦いの噂を聞くと、テッサリアに入って、一気にクティメネーとアンゲイアイを占領した。アミューナンドロスも（彼を王と仰ぐ）アタマニア人も、ローマ人の戦争が成功のうちに進んでいると聞いて、じっとしてはいなかった。

(14) アタマニア人とアイトリア人が、マケドニア人の恐怖が取り去られて他者の勝利に乗じて自己の利をなし、テッサリアが、いずれを敵、いずれを盟邦と信ずればよいのかはっきりせず、三つの軍隊[15]によって同時に荒らされるうちに、コンスルは敵の逃走によって開かれた隘路を通ってエーペイロスの地に踏み込み、有力者カロプス以外のエーペイロス人の中でいずれがいずれの味方であるかははっきりと分っていたが、彼を満足させるために彼らが孜々として彼の命令を実行するのを見ると、過ぎ去ったことよりは現在の様子によって彼らを判断して、気軽に許しを与えることによって将来にわたって彼らの心をつかんだ。(15) テッサリアの平原に降り立つと、エーペイロスの農地を略奪から免れさせて来たため、軍隊にはもはやあらゆる物資が欠乏していたので、若干個の大隊を交替で補給のために（ローマの輸送船が停泊する）アンブラキアに派遣した。陣営は再びあらゆる物資に満たされた。そこからアトラクスに向かった。(18) アンティキュラは戦闘にさほどの時間を要することなく手に入れた。その他、フォーキスの名もない砦は武器の力よりも恐怖心を起こさせることによって降伏させた。エラテイアは城門を閉ざし、武力を用いなければローマの将軍なり軍隊なりを城内に入れないように思われた。

(19) エラテイアを包囲していたコンスルに大きな希望の光が輝いた。アカイア人に王との同盟を捨ててローマと友好関係を結ばせる、という希望である。彼らは祖国をフィリッポスの側に引き寄せようとする党派の首領であるキュクリアダスを追放し、自国をローマ人と結び付けようと望むアリスタイノスをアカイア同盟の長官としていた。ローマ艦隊はアッタロスおよびロドス人と共にケンクレアイに在り、全員の合議によってコリントス占領の用意をしていた。そこでコンスルは、そのことがなされる前に、まず使節団をアカイア同盟に送

り、もし彼らが王を捨ててローマと結ぶならば、コリントスを以前の通りアカイア同盟総会の一員に戻すことを約束させるのが最も良いと考えた。コンスルの音頭で、彼の兄ルーキウス・クインクティウス[16]とアッタロスとロドス人とアテナイ人からアカイア同盟に使節団が送られた。彼らはシキュオンにおけるアカイア同盟の臨時総会[17]に招き入れられることになった。

アカイア人の間ではまだ気持が一つにまとまっていなかった。不断の仇敵であるスパルタ王ナビスが彼らを脅やかしていた。また彼らはローマ人の武力を恐れた。マケドニア人に対しては古い恩恵、新しい恩恵による負い目があったが、王自身に対しては残酷さや背信によって不信の念を抱いていた。王が戦争後により苛酷な支配者になるだろうと考えたのは、彼が当座の状況に応じてなしたところから判断したからではない。彼らは、それぞれが各自の属する共同体の評議会で、或いは同盟の臨時総会で何を自分の「意見」[18]として表明するか自分でも分からなかったばかりでなく、みずから考えてみても、何を望み、何を択ぶべきかよく分からなかった。使節団は、このように曖昧な人びとの中に引き入れられて、発言の機会を与えられたのである。最初にローマの使者ルーキウス・カルプルニウス、次にアッタロス王の使節団、続いてロドス人が論述した。次にフィリッポスの使節団に発言の機会が与えられた。最後にアテネ人たちがマケドニア人の議論に反駁を試みて傾聴された。アテネ人はいずれも――彼らほど多くの苦杯を王から舐めさせられたものはいなかったので――口を極めて王を弾劾した。そしてこの予備集会[19]は、日がな一日かくも多くの使節たちが次から次へと熱弁をふるったのち、日没とともに解散された。

(20)　その翌日も臨時総会が召集された。ギリシャ人の習慣に従って、演説をする希望者があれば、政務官がその機会を与える旨、布告係りから告げられたが、進み出る者はなく、互いに顔を黙(もだ)しつくした。(21)　そこで長官アリスタイノスは言った。「アカイア人指導者層の諸君[20]。諸君は、誰も「意見」を述べたがらないし、述べる気持もないのだから、昨日行なわれた使節たちの演説を彼らそれぞれの「意見・決議案」として検討してみようではないか。つまり、彼らは自己の利益となるものを要求したのではなく、われわれの利益となることを説いてくれたのであるかのように。ローマとロドスとアッタロスは我われとの友邦・盟邦の関係を求めており、フィリッポスとの戦争において我われの助力を喜んでくれる。フィリッポスは我われに盟友関係と忠順の誓い[21]を想起させ、彼の側に立つことを要求したり、かと思うと我われが武力介入しなけ

れば満足だともいう。まだ盟邦になっていないものが盟邦以上のものを要求するのはなぜか。フィリッポスからは一人の使者が来たのみで、それ以外に何者も見られない。だが、ローマからは艦隊が来て、現在ケンクレアイに在る。コンスルとその軍団は、ここから一衣帯水のフォーキスとロクリスを進軍中である。ローマ人は、16年もの間[22] イタリアの奥地で苦戦を耐え忍んだのちポエニ戦争を戦い終え、アイトリア人が戦争をしても防衛軍を送るのではなく、みずから戦争のリーダーとなって、海に陸にマケドニアに戦いを挑んだ。既に3人目のコンスルが全力を挙げて戦争と取り組んでおり、クィンクティウスは、エーペイロスの隘路に陣取った王を陣営から引きずり出し、テッサリアに逃げ行く王を追い、その守備隊と盟邦の諸都市を、殆ど王の目の前で手に収めてしまったのだ。今しがたアテネの使者が王の残虐さ、貪婪さ、欲望の激しさについて語ったことは、真実ではないとしよう。また、アッティカの地で天上の神がみ、地下の神がみに対して王が犯した悪行も我われには関係はなかろう。ペロポネソス半島の真っ只中のメッセーネーにおける殺戮と財産の略奪、シキュオンの人アラートス父子[23] ——この不幸な老人を王は父と呼ぶ習慣だったのだが——が殺害された事。この息子の妻もまた王の情欲のために拉致されてマケドニアに連れ去られた事[24]、その他処女たち主婦たちに対する醜行も忘れられるに委ねよ。もうフィリッポスの問題なんぞ存在しないことにしよう。彼の残虐さへの恐怖からみんなは言葉を失ってしまっている。

ローマ人の方から進んで我われとの友好関係を求めるのであるから、諸君は、望ましいもの、最大の努力を払って求めるべきものに背をむけてはならぬ。彼らは制海権を握っている。陸地は、どこへ行こうと、たちまち支配下においてしまう。彼らはお願いする筈のものを無理強いして、イヤとは言わせない。彼らは諸君を赦そうと望んでいるから、諸君を没落させるようなことは何もしない。諸君にとっては、ローマとの同盟を受け入れるか拒否するかのどちらかしかないわけだが、およそ、どことも堅固な恩義の関係を築くことなく、あたかも我われの取る道を運命任せのようにするのは、勝者の餌食になってしまうことにほかならぬ。万人の祈願の的であったものが、向こうから進んで与えられたなら、それを拒否してはならない。今日のように、どちらを択んでもいいと言うことがいつまでも続くものではない。好機は頻繁に訪れるわけではないし、長く続くものでもない。フィリッポスから自由[25] になることを、諸君は既に永いあいだ望んできたが、それを実行しようとはしない。諸君がみずから

労すること、危険を冒すことなくして諸君に自由をもたらそうとする者が海陸の大軍を率いて海を渡って来ているのだ。諸君が彼らと結ぶことを拒否するのは正気の沙汰とは言えない。だが彼らを盟友とするか敵とするか、二つに一つしかないのだ」。

(22)　長官の演説がおわると、賛成する人々の声と、それを厳しく非難する人々のブーイングが巻き起こった。そして、やがて個々の参会者ばかりでなく、それぞれの共同体ごとにまとまって互いに言い合いを始め、さらに同盟の公職者――ダーミウールゴスと呼ばれ毎年10名えらばれる[26]――のあいだにも民衆に負けず劣らずのいさかいが始まった。そのうちの５人は、ローマとの同盟を提議して投票に持ち込みたいと言い、５人は、政務官にはフィリッポスとの同盟への反対を提案する権利がなく、会議には決議する権利がない、とする法がある、と証言した。この日も会議は議論のやり取りのみに終わった。

本会議はまだ一日残っていた。と言うのは、法の命ずるところでは、第三日目が決議の行われる日であった。その日のために人々は熱狂し、親が実の子供に手控えしないほどだった。ペレーネーの人にピシアスという者がいた。息子のメムノーンはダーミウールゴスで、（アリスタイノスの）決議案が読み上げられ、それをめぐって意見が求められるのを阻止しようとするグループに属していた。父は長い時間をかけて息子に懇願し、アカイア同盟のメンバーに同盟全体の安寧を考えしめようとし、彼の頑固さによって全アカイア人を破滅に導くことがなきようにさせようとした。その懇願が聞き入れられないのを見ると、父はみずからの手で彼を殺すつもりであり、もはや彼を息子とは見做さず、敵と見做すだろうと誓った。この脅迫によって翌日、息子が提案者側に加わる結果を勝ち取った。彼らは多数派となることを得て提案し、まさに大方の共同体の賛成を集め、何を決議するかを公言したので、デューメーの者、メガロポリスの者、および一部のアルゴスの者は、決議がなされる前に一斉に立ち上がって、会場をあとにした。だが、これを見て訝る者、非難するものはなかった。と言うのは、先祖からの記憶によれば、メガロポリスびとがラケダイモン人に逐われた時、彼らを故郷に復帰させたのはアンティゴノスであったし[27]、また、デューメー人が最近ローマ軍に町を占領され略奪されたとき、いたるところで奴隷身分に落とされていた彼らを買い戻すように命じて、自由身分のみならず故郷をも彼らに取り戻してやったのはフィリッポスであった。そもそもアルゴス人は、マケドニアの王家がアルゴス出自であると信じて

いたばかりでなく、多くの者が私的な賓客関係によって、また家族間の友誼の絆によってフィリッポスと結ばれていた。これらの事情のため、彼らはローマとの同盟の決定に傾いた会議の席から退出した。そして、彼らが最近受けていた大恩ゆえに、退出に対しては寛容が示された。

(23) それ以外にアカイア同盟を構成する諸共同体は、「意見」（決議案）が投票に付されると、ただちにアッタロスおよびロドスとの同盟を確認した。ローマとの同盟は、ローマの民会の批准[28]が必要だったので、ローマに使節が送られるまで待たなければならなかった。差し当たり、3人の使いをルーキウス・クィンクティウスのもとに送り、アカイア軍全員をコリントスに移動させることが決まった。クィンクティウスは、ケンクレアイを占領したのち、まさにコリントスを攻撃していたのである。

(24) （他方）コンスルはフォーキスに在って、エラテイアに近く陣営を設け、はじめエラテイアの第一人者たちとの話し合いによって目的を達しようとしたが、彼らが、自分たちには何の力もない、市民よりも王の駐留軍の方が数も多いし、力も持っている、との返事を得ると、町をあらゆる方向から一時に、攻城施設と武器とをもって攻撃した。こうしてコンスルはこの町を占領した。町が略奪されたのち彼は、王の兵士に、もし武器を擱いてここを立ち去ることを望むならば生命は助けること、エラテイア市民には自由を約束すること、を伝える使者を砦に送り、これらの事に関して彼と彼らの間に信義の関係が成り立ったことを保証して[29]、数日ののち砦を接収した。

(25) 都市アルゴスも何人かの「第一人者」の手によって、前もって平民たちの意向を探ったうえ、王の部将フィロクレスに引き渡された。（アルゴスでは）民会の日に、最初に、あたかもよき前兆のように、長官たち[30]がゼウス、アポロン、ヘラクレスの名を呼ぶ習慣であったが、これにフィリッポス王の名が付け加えられることが法によって定められていた。この名を、ローマと同盟が約定された後、呼び役が付け加えなくなったので、まず民衆の不満の声がおこり、ついで、フィリッポスの名を付け加えようとする者、これを法で定められた名誉として実行すべきであるとする者の叫びが起こって、遂に大きな賛成の叫びのうちに王の名が読み上げられるに至った。フィロクレスは、この好意を信頼し、これに乗じて夜中に町の傍らに迫ってそびえる丘を占領した。――この丘はラリサと呼ばれていた――。ここに守備隊を置き、夜明けと共に、軍旗を押し立てて砦のふもとの広場に侵入した。すると相手は戦列を整えて向っ

て来た。それはアカイア人の守備隊で、最近置かれたものだが、アカイア同盟のあらゆる共同体から選抜されたほぼ500人の若者から成り、デューメーの人アイネシデーモスが指揮をとっていた。彼らのもとにフィロクレスから使者が送られ、町から退去するように命じた。はじめ、この命令は指揮官のアイネシデーモスも守備隊自身も動かさなかったが、しばらく経って他の方向から武装したアルゴス兵そのものが大きな隊列を組んで近付くのを見ると災いは避けられないと感じ、守備隊長が頑固な態度を取ると彼らは全滅の憂き目に会うことが確実であることに気が付いた。アイネシデーモスは、アカイア人の若者の花がこの町と共に失われないように、彼らがおだやかに立ち去ることを認めさせたが、みずからは少数の庇護民と共に、その場に甲冑を着けたまま仁王立ちになって退かなかった。フィロクレスから遣わされた者が、何を望むか、と訊ねると、自分の前に楯をかざしたまま立った場所を動かず、自分に委ねられた町を守りながら、武装したまま死ぬつもりである、と答えた。フィロクレスは命令を下し、トラキア人の兵士の投げ槍によって全員が殺された。こうして、アカイア人とローマ人の間に同盟が成立したのちにおいて、アルゴスとコリントスという二つの有名な都市がフィリッポスの支配下におかれることになった。以上がこの夏、ローマ人がギリシャにおいて為した事柄である。

訳注

1）有名な大スキピオ。なおこの民会はいわゆる「兵員会（comitia centuriata）である。

2）この二人は次年度（前198年度）の護民官である（Broughton MRR I 331）。その行動が前199年のこととして記録されるのは、コンスルをはじめとする大抵の公職の新年度が3月15日に始まり、護民官の新年度が前年の12月10日に始まったからである。12月10日から翌年の3月14日までは、旧年度のコンスルと新年度の護民官とが並存する。—なお、コンスルの年度の開始は、古くは一定していなかったが、前3世紀の前半には5月1日からであったらしいが確かでない。前222年には3月15日となり、前153年からは1月1日になって、それが固定した。Mommsen, R. Str.I 598f. Kunkel, Staatsordnung 86f. 護民官の就任日は古くから変わらなかったようである。—

一般に歴史記述においてはコンスルの年度によって年を表す。

3）次にあるように、彼は貴族アエディーリスとプラエトルの二つのポストを飛ばしてコンスルに立候補したのである。彼は旧貴族（パトリキ）の家柄であるから、もともと護民官と平民アエディーリスの地位にはつけなかった。——なお原文 ex quaestura は「クアエストルからいきなり」と訳したが、これを「すぐ翌年に」の意味に解し、彼が前199年にクアエストルであった、と解すること

が可能である（MRR I 329, n.2. Briscoe ad loc.）。そうすると、クアエトルになるのは30歳ごろが常識的なので、彼の誕生を通説に従って前228年とすると、彼は30歳で早くもコンスルになったことになる。

4）この時代にはまだ、前180年のウィリウス法に定めるような、就任順序、年令などに関する定めはなかったが、立候補者がローマ市民成年男子であること、あるポストには旧貴族（パトリキ）は就任できないこと、など、若干の制約はあった。

5）各年度の最初の元老院会議はカピトリウム丘のユピテル・オプティムス・マクシムス神殿の内室（cella）で行われた（RE Suppl.-Bd. VI Art. Senatus Sp. 703/4）。

6）「プロウィンキア」（provincia）は、リーウィウスが描いている時代には「管轄」の意であり、provincia X が「X州」の意味に近くなるのは前2世紀の末ごろからである。吉村忠典『支配の天才ローマ人』241～244頁参照。

7）socii Latini nominis（ラテン権諸国を含むイタリアの盟邦諸国）については OLD s.v.socius[2] 6 が最新の説である。盟邦については次注を参照。

7a）これはローマという都市国家の命令権（imperium）保持者が他国の王（rex）に「命令」を下し（imperare）、王がこの命令に服従する、という、近代国家（＝主権国家）の間ではありえない筈の国際関係で、Liviuis には他にも現れる（XXIX 11, 2. XLII 6, 8. XLIII 6, 2f.. 拙著『古代ローマ帝国の研究』169頁以下参照）。私は本学紀要創刊号（1993年3月）24頁に、「属州総督（＝軍司令官）の行使する imperium が technical なものであるか non-technical なものであるかを当時の人は問わなかった」と書いた（＝同拙著 224頁）。他方、現代人が「命令」という言葉を使う時には「主権」という古代にはなかった観念が付き纏うので、前近代社会の理解にこの言葉を使用するには注意深くあらねばならぬ。

8）socii, amici, socii et amici の三つの表現は事実上同じものを指すが、一応「盟邦」、「友邦」、「盟邦かつ友邦」と訳しておく。（共同体の場合は複数、王のような個人の場合は単数）。すなわち、ローマとの間に、特に条約が存在しなくとも、平和的な国際関係を維持している国・王（国）である。ローマとの間に「条約」（foedus）を結んでいる国は「条約国」（foederati, civitas foederata）と呼ばれる。

9）auxilia　ローマ軍の構成においては、正規軍（軍団）と並ぶ非正規軍（外人部隊で、ふつう「補助軍」と呼ばれるが、ラテン文学の邦訳では「援軍」と訳されること多い。その方が分かりやすいだろう。

10）この世界の唯一のスーパー・パワーであったローマは、このような慇懃な言葉で事実上の「強制」「命令」を表現した。

11）エーペイロスは部族同盟の国家で、最高の地位は長官（strategos（ギ）＝praetor（ラ）、次が騎兵長官（hipparchos（ギ）＝magister equitum（ラ））であり、同盟の総会があった。Busolt-Swoboda,Griechische Staatskunde II 1475ff.,とくに1477,注2を参照。1476,8 ではここの concilium を同盟総会と解するが、Briscoe ad loc. はこれをもっと下級の会議と解しており、Loeb もそのように解しているようである。だが、そのような下級の会議が史料にでてくるかどうか、今の私にはわからない。

12）テッサリアはフィリッポスにとって、父祖から受け継いだ最大の地盤であっ

た。

13) これは当夜が満月かそれに極めて近かったことを意味し、従って次節のアオーオス川の戦いが6月25日ごろであったことを示しているという（Walbank, Philip V, 152, n.4. 319）。

14) アオーオス川。

15) マケドニア軍、アイトリア軍、アタマニア軍。

16) 当時はローマの海軍の司令官であった。

17) 当時のアカイア同盟には年4回の定例総会（bule, synodos）と不定期の臨時総会が（synkletos, concilium）があった。さらにLiviusには「各国の自国（同盟を構成する各共同体の評議会（19, 9 senatus civitatis suae[上に訳出]）と決議機関ではない集会（19,13. 20, 7　contio: 下記、注4を参照）が言及されている。しかも、この contio は 19, 5 で concilium = synkletos とよばれるものそのものである（20,7 の contio も同様である）。アカイア同盟の集会については分からぬことが多い。Cf. Walbank,Commentary Ⅲ（1979）396f.（Polyb. XXIX 23～25　への注釈）。406f.A. E. Astin, CAH VIII^2（1989）296, 13. R. M. Errington, Philopoemen（1969）6f.

18) ローマの元老院では審議中に個々の議員が発言した「意見」（sententia）が決議案として採決にかけられる（Mommsen, R. Staatsrecht Ⅲ 977 及びAnm. 7. RE Supplementb. Ⅵ（1935）Art. Senatus Sp. 715～717）。リーウィウスはその用語で語っている。

19) ここの contio を「予備集会」と訳した。22, 4（上に訳出）によれば、アカイア同盟の justum concilium では、最初の2日は審議のみが行われ、3日目に決議が採択される。ローマの contio とは決議機関ではない自由な集会で、同一の日に決議機関である民会の前にもおこなわれた。ここからリーウィウスは、アカイア同盟の justum concilium の最初の二日（決議が行われない）を contio と呼んだのであろう。

20) principes、普通「第一人者」と訳されている。社会の指導者層、名望家層の者を指す。しかし、ここはアカイア人全体の集会の場であるから、この呼びかけはおかしい。Briscoe（ad loc.）はこれに次の三つの可能性を考える。a）このような集会で発言するのが普通であるアカイア人社会のリーダーたちを頭において演説をしている。b）アカイア人の中でも経済的にも時間的にもゆとりのある富裕な人、名望家層しかこのような集会に出席しえなかったから、このような呼びかけになる。c）リーウィウスの不注意で、アリスタイノスがローマの元老院のような集会で発言しているように錯覚して記している。そして，Briscoeはｃ）をとる。訳者はむしろａ）を取りたい。すなわち、話者アリスタイノスには、principes しか眼中にない。寡頭制社会に生きるリーウィウスは、おのずからそのような意識で情景を描く。極端に言えば、リーウィウスにとっても、貧民はもともと眼中にない。

21) アカイア同盟は毎年フィリッポスに忠順の誓いをする約束をしていた（XXXⅡ 5, 4）。

22) 前218年～203年（Briscoe）。

23) アラートス父子はアカイア同盟の政治家。フィリッポスと親しかったが、の

ち政策上の対立からフィリッポスに毒殺された。Polybios Ⅷ 12［Walbank の注釈を参照］, Plutarchos, Aratos 54, 1～3.

24) Briscoe の注釈はこの女性（Polykrateia）を Perseus 王の母としている。この説はBeloch, Griech. Gesch. Ⅳ 2, 139f.に遡るもので、Walbank, Commentary on Polybius Ⅰ 589 (1957) , Philip V of Macedon (1967) 261, 3 もこれに従っている。しかし、Geyer, RE Perseus (1937) 996/7 はこれに従わず、最近では Ziegler RE Polykrateia, Der Kl.P. s.v. Polykrateia (1979) もこの説を ganz unsicher としている。

25) ローマ人がギリシャ人に「自由」(libertas) を与えることが、今後のリーウィウスの叙述のライトモティーフになる。これについては吉村『支配の天才ローマ人』に詳しい。

26) アカイア同盟の公職の中枢部には毎年１名の「長官」（ラ：プラエトル、ギ：ストラテーゴス、「将軍」）と10名のダーミウールゴス（ギ：「共同体のための働き手」）がいた。アカイア同盟の公職についてはWalbank, Commentary Ⅰ (1957) 219. 235. Ⅲ (1979) 191 (N.B.) . 222. 699 ,および Briscoe ad loc.を参照。ギリシャ世界のダーミウールゴスについては、村川堅太郎「デーミウールゴス」(はじめ Historia Ⅵ (1957) に英文で掲載、のち邦訳が『村川堅太郎古代史論集』Ⅰ (1986) に収録された)、アカイアについては同論文邦訳版 245頁以下を参照)。ここに見られるように、長官は、会を召集することは出来たが、決定には参加できなかったらしい。

27) スパルタのクレオメネス三世がメガロポリス人を追い出したのは前223年の秋 (Walbank, Commentary Ⅰ 258) ,アンティゴノス・ド-ソンがクレオメネスと戦ってこれをれを完敗させたのは222年であるから、「先祖の記憶」というのは大袈裟である。なお、アンティゴノス三世ドーソンはフィリッポス五世の前のマケドニア王。フィリッポスの祖父の甥、在位：前229年～221年。

28) ローマの習慣では外国との条約には兵員会（comitia centuriata）の決議が必要だった。

29) いわゆる「信義への降伏」(deditio in fidem)、本来 deditio（無条件降伏）であるが、ローマの将軍が、相手が抵抗をやめて降伏する代わりに、生命や「自由」を尊重することを約束し、この約束を守ることが信義の問題とされる。(但し、実際にはこれによって降伏した側は恩を着せられて、ローマの意に反することは忘恩と解されてローマに咎められ、しばしば、動きがとれなくなるのが普通である)。

30) アカイア同盟の長官ではなく、共同体（都市国家）アルゴスの長官。(Br.)